
Muv-Luv TE-if-

アンノーン万歳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v T E - i f -

【Nコード】

N 4 1 0 6 Z

【作者名】

アンノーン万歳

【あらすじ】

マブラヴはトータルイクリップスしか知らない作者が書く、「もしもネクストACを駆る事が出来るパイロットが居たら？」という二次創作のSSです 余り詳しくないために設定の矛盾など多々有るかもしれませんが温い目で読んでやって下さい

プロローグ

2001年 4月 30日

アメリカ合衆国 ネバダ州南部 グレーム・レイク空軍基地 通称
エリア51

アスピナ機関、米軍共同研究区域特殊実験施設

太陽の光も入らない、光源も何も無い狭い密室の中。

衛士用の強化装備を着ている意外はなんの変哲も無い少年。 年は
十代半ば、それより少し若いといったところか。

「――AMS、接続開始します」

「接続レベル、0，01から開始。 時間の経過と共にレベルを上
げていきます」

彼が普通の人間と決定的に違う所があればただ一つ、義体の様に
増設された首の後ろ。 頸椎に当たる部分の接続用ジャック

そこには既にプラグが差し込まれ、それが続く先は椅子――正確に
言えば“コックピットのシート”

何も知らぬ他人がこれを見れば、狂気の人体実験としか思えないだ
ろうし、事実彼らがやっている事はある種狂気じみている

「エクスペリメント05とラインアークの完全接続を確認。 成功
です」

「ふむ……では、AMSの接続レベルを0，5までゆっくりと上げ
て行け」

“人体と機械の融合” 脊髓や延髄を経て脳と戦術器の制御装置を直結させてデータのやりとり。

Allegory Manipulate System

戦術器の近接戦闘における反応速度の超上昇、思考によってコントロールされる精密射撃、視覚情報の共有による敵の早期発見。主にこの三つを目的として開発された戦術器の新たな操縦方法。

脳と制御装置における電気信号を完全に理解、やりとりする必要性が有るために操縦出来る人間は極僅かだが、AMSを搭載した戦術器は並みの戦術器とは比べ物にならない性能を誇る。

「AMSの接続レベル2, 5に到達……凄い、理想値の二倍を超えている。エクスペリメント05もまだまだ余裕みたいですね」

「これなら自分の体のように……いや、自分の体を動かすよりも容易く戦術機を操れるだろう

ふんっ……何が役に立たない机上の空論だ！ いざこうして完成させてみれば、今までの戦術機など塵芥も同然ではないか！！

戦場は変わる、時代遅れのノーマルTSFは排斥されて私の発明こそがBETA共を蹴散らしてくれる！」

——故に、こう呼ばれるのだ。

「私のネクストがなア！！」

次なる者

2001年現在 世界人口約10億人 日本人口約7400万人
人類は以前滅亡の淵に有り——されど、一筋の光が現れる

アスピナ機関に属する少年の名をエクスペリメント05。 20

人のAMS適正所持者の中でもずば抜けた適正を持つ一人の少年
そして彼専用^{戦術機}に開発されたネクストTSFLINE ARC、コー
ドネーム『ホワイトグリント』
単純戦力にして戦術機数十機分とも呼ばれる程の彼等の登場が、果
たしてこの世界に何を齎すのか――

プロローグ（後書き）

基本的な知識について

・AMS

パイロットと機体をコネクタによって接続、機体情報を電気信号としてパイロットが脳を使って直接やり取りする操縦方法
通常の戦術機は

思考↓入力（操縦）↓出力（戦術機の行動）だが、AMSを搭載していると思↓出力

レバーやスイッチなどの操縦という過程をすっ飛ばしていきなり戦術機がパイロットの望んだ通りの動きを行うために反応速度が非常に高まり、指先といった細かな挙動も御しやすくなる

一方で機体情報を総て電気信号として受け止めるために、AMSを扱うには特殊な才能が必要となり、さらに戦術機が与えられたダメージはパイロットにもフィードバックするという弱点もある。

一言で言えば、エヴァンゲリオンのシンクロ

・AMS適正

文字通り、AMSをどこまで上手く扱えるかのような基準値。

適正が低ければ機体の操縦はそれだけ大雑把になり、適正が高ければより細かな挙動が可能。

指先といった細かい部品を排除し、情報量を減らすなどすればAMS適正が低くてネクストを操る事が出来る（他には腕を丸ごと武器にする、等）

・接続レベル

オリジナル設定、パイロットと機体をどれだけシンクロさせるか。この数値が高ければ高いほど細かな操縦を行う事が出来る、という点ではAMS適正と殆ど同じ。

しかし、接続レベルをパイロットの適正に見合わぬ程に上げてしまうとパイロットの精神に大きな障害を与える諸刃の剣。

これの調整は非常に難しく、今までに四人の人間がAMS接続レベルの上げすぎによって“壊れて”いる。

AMSとはパイロットと戦術機を接続する、言ってしまうえば自分＝戦術機となるのだ。

あまりにその結合が強くなれば“自分”を見失ってしまい、その例えようなない感覚に耐え切れずに壊れてしまう。

・LINE ARC ホワイトグリント

主人公の乗る機体、詳しくは「ホワイトグリント」で検索。

武装はライフル二挺と分裂型ミサイル、状況に応じて変更可能。

アサルトアーマーとかプライマルアーマーは流石に使えない、それでもAMSを搭載しているために並みの戦術機とは比べ物にならない戦力となる。

プロローグ2

空は灰色の雲に覆われ、大地は永遠に終わらないかのようにのうに地平線へ続く砂で覆われている。

その上空200m程を高速で飛翔する白の閃光――

「エクスペリメント05のAMS接続レベル5，0にて安定――ラインアークの戦闘エリアまで後十秒」

戦闘機とも戦術器ともかけ離れたその姿を一言で例えればX字だ
両腕は肩と共に正面へ突き出され、その手に持ったライフルは機体の前へ向けられている。

背中に翼のように取り付けられた十四個のブースターは七個ずつ一直線に広げられており、更にそのすぐ下には十二個のブースターが六個ずつ、丁度X字になるようにして青い炎を吹いている。

頭部は突き出した胴体に埋もれるように埋没してあり、とても人型とは思えない。

一直線にならぶブースターの両端に付けられた三角の箱は分裂型ミサイルSALINE05。

両腕にはそれぞれ051ANNR、063ANARと呼ばれるライフルを装備したその戦術機の名――未だどの国のデータベースにも登録されておらず、この世で唯一AMSを搭載した実践的な戦術機。

『こちらエクスペリメント05ホワイトグリント、作戦を開始します』

——LINE ARK ホワイトグリント 白い閃光、ネクストTSFと呼ばれる通称
“最強の戦術機”

それが行なっている今回の作戦は単純明快、進行してきたBETAの集団を一騎で全滅させる事。

本来ならば何機もの戦術機と補給用コンテナを用いて行われるような任務に対して、投入している戦力は一騎——正気の沙汰では無い。

BETAの中でも光線級と呼ばれる遠距離砲撃に特化した機体は既に“彼”とホワイトグリントを認識し、その眼球の様に見える部分に少しずつ緑色の光が集まっていき——放たれた。

その一筋に伸びていく緑の光線は確かに^{レーザー}ホワイトグリントに向かって飛翔し——

瞬間——爆音と共にホワイトグリントは姿を消した

「クイックブースト……瞬間最高時速は2500kmと言った所か、VOB無しでこの速度……ふふ、凄まじいな——」

「それはオーバードブーストとクイックブーストの同時起動ですから……ですが、チューニング次第ではこれ以上の数値も可能ですよ」

次の瞬間、先程までホワイトグリントが飛翔していた場所より遙か斜め前に現れる純白の塊。

あれ程の速度で巡航を行なっているながら急激な加速で無理矢理進路を変更し弾を回避する、戦闘機でも戦術機でも不可能なそれを成し遂げる。

それを成功させたホワイトグリントが使った機能は単純、オーバードブーストと呼ばれる超高速機動中に使用したクイックブーストと呼ばれる瞬間的な急加速だ。

通常、戦術機において一瞬でこれほどの加速を行えば機体のバランスが制御出来なくなったり、登場者がGに耐えられなくなったりで使い物にはならない。

しかしネクストは違う——AMSと呼ばれる特殊な制御方式を採用し、さらにこれまでの研究データを元に開発された特殊強化装備を着込む“彼”ならば。

進路を無理矢理無視して瞬間時速2500kmで急激な挙動を可能とするこれは最早“テレポート”と呼んでも相応しい。

ミサイルなど目前僅か数mに迫ったところから回避できるし、遠距離から放たれるレーザー等“予め発射される事を分かっていたら”何という事は無い。

その異常な瞬間速度も少しずつ下がっていくとそのままホワイトグリントの両肩のミサイルハッチが開き、火薬が炸裂するような音と共に二つのミサイルが放たれる。

『ホワイトグリント、ミサイルの着弾を確認後オーバーードブーストを解除して通常戦闘に移ります。

——戦闘データ、ちゃんと取ってくださいよ』

「ふふっ……ああ、任せておきたまえよ。私の愛するホワイトグリントが戦うのだ……一瞬だって目は離さないさ!!」

そのまま次々と放たれる三発、四発目のミサイル——強引な光線の回避と共に響いた火薬の炸裂音の回数が一つにつき丁度24を超えた辺りで、背部ミサイルユニットはユニット接合部に予め装填された炸薬によってパージされる。

ホワイトグリントの後方へと落ちていくSALINE05、一方ソレが最初に放ったミサイルは変貌を始めていた。

「ミサイル第一射、着弾まで10……9……」

一番最初に放たれた中型のミサイルが、空中で“分解”した——いや、正確にはそう見えただけ。

ミサイルを覆う白の装甲が剥離して中から現れる八発の小型ミサイル……S A L I N E 05の所持する分裂ミサイルはその名の通り八つの小型ミサイルに分裂してそれぞれが違う目標に接近する

それが24×2×8、合計で384発放たれたのだ——いくら小型とはいえその威力は対人兵器の比ではない。

小型の戦車級や防御力の余り無い光線級はおろか、要撃級、さらに突撃級にすら致命的なダメージを与える事が出来る。

広大な砂漠には無尽蔵の砂煙が散蒔かれ、B E T Aだった残骸がバラバラに落ちてくる地獄の様な様相を見せる場所にホワイトグリントが着地する。

着地する前に行われた変形により頭部はちゃんと上部へせり出しているし、X字のブースターも折り畳まれてより戦術機らしい外見には近付いているが……その戦闘力はやはり戦術機を凌駕していた。

クイックブーストによる回避、射撃、射撃、回避、射撃、回避、回避、射撃射撃射撃……

無限とも呼べるほどの機動力を持つホワイトグリントに鈍重なB E T Aが近接戦闘に持ち込める筈もなく、突撃級の攻撃も簡単に回避され——挙句には跳び箱の様に突進する突撃級の外角を踏み台にして跳躍——そのまま装甲の薄い後方部へ射撃。

戦術機はおろか人間ですら可能か不可能か分からない機動で回避と攻撃を一つの動作の中に纏めたのだ、その様な行動を容易く行うホワイトグリント一機に対してB E T A群は蹂躪され続け……

そうして作戦開始から十数分が経過した後。

BETAの全滅を確認した統合仮想情報演習システムは終了、複数による訓練を想定した対BETA防衛戦維持訓練。

それもBETAの数を通常の何倍にも増やした訓練すらAMSを搭載した戦術機——ホワイトグリント一機にすら及ばないという事実が全世界に証明される事になった。

この情報を受け、世界——特に戦術器の能力不足に悩む日本は“ネクスト”の研究を、可能ならば実戦配備を行うべきとの結論に到達。

XFJ計画の要項に加えられた一つの文章——それは至極単純な物

・アスピナ機関、及びアメリカの協力により不知火に試験的なAMSを搭載、戦力やパイロットへの副作用を初めとしたデータの収集

2001年 5月 3日

アメリカ合衆国 ネバダ州南部 グレーム・レイク空軍基地 通称
エリア51

地下四階 アスピナエリア

「先のデータを受けて、日本からもアスピナ機関への協力の申し出

が有ったよ。

ふふ——純国産の不知火をアスピナ機関で改造して良いらしい……
とはいっても、AMSを乗っけるだけだね。その代わり戦闘
データはこちらも貰って良いらしい。

……君にこういう話は分らないかな？」

『……申し訳ありません』

一つの長机を挟んで椅子に座る金髪の男と、それに向かい合う形で立つ少年。

前者の姿はホワイトグリンのシミュレーターをずっと見ていた初老の男、後者はそのホワイトグリンを操っていた少年——エクスペリメント05。

男はぴっちりとしたスーツを着こなしている一方、少年の方は衛士用の強化装備の上から長袖のジャケットを適当に來ているだけなのも印象的だ。

何よりも印象的なのは、彼の服装か

強化装備には記されているのはOとTを組み合わせたかのようなアスピナ機関のマークであり、国家や軍属である事を示すマークは付いていない。

ジャケットは恐らく市販の物——ここまで来れば、彼の立ち居地が分かるだろう。

彼は軍人ではないし、何処かの国家にも属していない。ただのアスピナ機関という研究機関に自分のAMS適正と体売り出した被検体であり傭兵の様な存在。

アスピナに正式に所属しているも階級等はそもそも無いし、軍隊の様に細かい規律も無いために服装も自由——ちゃんと上の指示さえ聞いていれば基本的に自由なのだ。

男の名前はリー・バトラー。ホワイトグリンツの設計から開発、さらにその運用の全てを一任された研究者であり機関の幹部。ホワイトグリンツに関連する事象は全て彼の命令で行われ、当然ホワイトグリンツのパイロットも彼の指揮下に置かれる。

「気に止む事は無いよランク1、元より我々が君に期待しているのはその高い適正と能力だ。」

考える事は我々の仕事だ……さて、そんな君に新しい仕事だよ」

『……』

口を開く前から、少年は大体察しが付いていた。

先程の日本軍の前置き、不知火の改造の話、そしてその後いきなり自分に渡される任務――

「君にはアラスカに行き、そこで試験型不知火のテストパイロットを勤めてもらう……アメリカ、日本、そして我々の協力任務だ。適正を持っていて尚且つテストパイロットが勤まるような実力を持つのは君だけだからね――」

プロローグ2（後書き）

Q. ホワイトグリント強くね？

A. プライマルアーマーとアサルトアーマーを持ってないからこれでも弱体化した方

追記1 通常戦術機操縦法とAMSの差について

強化衛士装備に関係する資料探しをしていたら、自分の無知によって作中に矛盾が発生してしまいそうになったので此処に記述します。

作中では、AMSとは「思考と同時に機体を制御する事が出来、才能さえ有ればほぼ直感だけで操縦できる」というように記述していました。

通常の前術機も間接思考制御で操縦しているという事を私は知らずに書いていました……

そのために、こちらにAMSと間接思考制御の違いを記述しておきます。

まず、通常の前術機の間接思考制御。

これはヘッドセットとスーツで脳波等を測定↓装着者の意思を統計的に数値化しデータを更新↓前術機や強化外骨格の予備動作に反映させる。

一方のAMS、これはヘッドセットとか関係なしに操縦者と機体が直結しています・

つまり、己がどのように機体を動かすかを“直感的”に電気信号に置き換えてそれを機体の統合制御体へ送信。

この二つがどのように違うかというと、情報の精度と反応速度です。前術機ならば『思考↓数値化↓データ更新↓動作』となりますが、AMSは『思考（と同時に電気信号に置き換える）↓攻撃』、つまり思考と同時に攻撃を行っております。

またAMSは『統計的に数値化したデータ』ではなく、文字通り機体Ⅱ自分の体となります。

それは当然、指先といった非常に細かい部分まで機敏な動作を可能としており、通常の戦術機とは一線を画す精密作業を行う事も可能。

ひとまず、操縦系統の差に関してはこのような設定です。

これから先も設定に矛盾やおかしな部分が有ればこうして追記していきますので、是非呼んで頂ければ幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4106z/>

Muv-Luv TE-if-

2011年12月19日23時18分発行